

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

編集後記

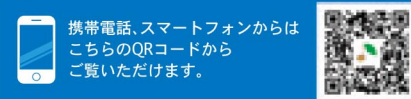
北海道に来てから、馬と暮らしていたとか、馬と働いていたという話をよく耳にするようになりました。農林業や鉱業で馬は必要不可欠な動物であり、各地に記られている馬頭観音や古い写真や逸話が当時の人々の思いを伝えています。つまり、それだけ暮らしに動物が密着していたのでしょう。都市部出身の僕にとっては遠い昔話のように思っていたものでした。

今回、森づくりの現場で馬と人が働く姿を見て、初めて見る光景なのになぜか懐かしさを感じました。そして、同時に改めて動物が人とともにあることの豊かさに気づきました。今は機械化で失われてしまった風景ですが、人と馬はこの北海道で苦労を共にしながら生きてきて、だからこそ地域のお年寄りの多くは、一緒に暮らした馬との思い出を大切に語ってくれるのでしょう。懐かしさを感じたのは、そんな古老たちの話を思い出したからなのかもしれません。

森づくりには色々な形や手法があって、その目的はさまざまです。こうした日本が古くから育んできた里山文化を大切にしたい森づくりも、100年先の未来のための宝物になっていくに違いない、そんな思いを抱いた取材でした。

あすもりfacebookページ

<https://www.facebook.com/coop.asumori>



モリイク vol.09
2015年4月発行
発行元/ コープ未来の森づくり基金

この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクおよび100%再生紙を使用して作成しています。

コープ未来の森づくり基金レポート

モリイク
MORI - IKU

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol.09
Apr. 2015



森づくりの
パートナー。

いつも動物たちが助けてくれた
仕事と暮らし

もりイク

馬と人が共に森で働く。
古くて新しい森づくりの手法が
新しい未来を教えてくれる

* contents *

- *02 コラム 森づくりのトレンド
未来のための市民による森づくり
- *04 特集 どうぶつのいるもりづくり
NPO法人 大沼・駒ヶ岳ふるさとづくりセンター
- *08 長く使えるモノづくりの意匠
しもかぶ工房
- *09 もっと樹のことを語ろう
大きな木の小さな物語
- *10 森に出かける前に知っておこう
森のコワイ!あぶない? 野山の安全安心ノート
- *12 森林再生コラム
吹雪の夜の思い出
- *13 コープ未来の森づくり基金報告
第5回 北海道の森づくり交流会報告 など

Starting Column

森づくりのトレンド

あした 未来のための 市民による 森づくり

私は学生時代(いまから30年くらい前ですが)、林業で働く人たちの生活を研究のテーマとしていました。多くの方は農家との兼業で山に働きに出ており、「昔は馬を連れて働きに来た」と語っていたのが印象的でした。木材はかさが張って重いので、人力で運ぶのは限界があります。

そこでかつては、農耕馬を持っていた農家の方々が、農閑期の冬に馬を連れて山に働きに行き、伐採した木材の運び出し(これを馬搬ばはんといいます)の仕事をしていたのです。その頃の山の現場は冬になると、伐採

ぎわったということでした。

しかし、ブルドーザーなどの重機が普及するにつれて、効率の悪い馬での搬出は機械に置き換えられてしまいました。また、農家でもトラクターなどの普及によって農耕馬を使うところはなくなってしまいました。

こうして山から馬の姿は消えていきました。

一方、最近馬搬を見直す動きが広まってきました。一つには馬搬を活発に行っていた地域で、これを文化として受け継いでいこうというものです。岩手県遠野市などでは馬搬を振興する会もつくられています。もう

一つは馬搬が環境にやさしいということに注目するものです。重機のように化石燃料を使って排気ガスを出さず、また重機のように林地を荒らしたり、周囲の木に傷をつける、といったこともありません。このように環境に配慮した森林の作業を進めるうえで馬搬が注目されているのです。

産業としての林業という点からは馬搬を進めることは難しいですが、文化・教育・環境保全といった観点から新しい森林の管理の姿を提示できる可能性を持っていると思います。

ところで家畜と森林はもう一つ別の関わりもありました。

それは混牧林こんぼくりんなどと称されるもので、森林を家畜の放牧地として利用するというものです。森林の中で家畜の育成をすることで、林業経営にとっては草刈りなどの手入れを省力化でき、家畜の糞尿が肥料となるといったメリットを得ることができます。一方、農業サイドでは家畜のエサを自然から得ることができるためコストを削減できるといったメリットがあります。

こうした森林の利用の仕方は古くからおこなわれていましたが、家畜経営と林業経営のメリットを両立させることが難しく、家畜・林業経営の効率化を求めるとすたれていっ

てしまいました。

しかし、混牧林についても近年見直しの動きもあります。例えば宮崎県諸塚村は、ほとんど平らなところがないような山村です。ここでは若い人工林に肉牛を放牧して、森林経営の省力化を進めようとしています。両者のメリットがうまく両立するように工夫しつつ、山を使って肉牛飼育という新しい産業を興そうとしているのです。

どこでも真似ができるわけではありませんが、古い技術と家畜と森林の関係を見直す中

で新しい森林の利用と地域の活性化を図ろうとしているのです。

馬や牛などの家畜と森林というあまり関係ないもののように思われます。しかし実は馬搬や混牧林などといった昔からのつながりがあり、それが今改めて見直されつつあります。経済的な効率を追い求めたためにすたれてきた技術を、文化、環境保全、教育、地域活性化などの観点から見直すことで、新しい森林の利用・管理のしかたをつくり、森林と社会、そして家畜との関係を構築する試みが進みつつあるのです。✦



柿澤 宏昭
(かきざわ ひろあき)

北海道大学
森林政策研究室 教授

コープ未来の森づくり基金 運営委員長

1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。現在、北海道大学農学部森林政策研究室教授。持続的な森林管理を多様な人々の協働で支えるしくみづくりをテーマに研究を行っている。また、欧米、ロシアなどの森林管理政策にも詳しい。主な著作に『エコシステムマネジメント』(築地書館)。2008年より「コープ未来の森づくり基金」運営委員長を務める。

にぎやかな
もりが
いい



大沼ふるさとの森づくり

NPO法人大沼・駒ヶ岳ふるさとづくりセンター・株式会社流山
大沼流山森づくりネットワーク・一般社団法人大沼牧場

森の中の馬。それはちょっと珍しい光景で、ふと目を奪われてしまいます。どこかヨーロッパのおとぎの国や、絵画のような風景を思い浮かべる人もいるかもしれません。多くの人は馬といえば広い牧場にいるイメージを持つのではないのでしょうか。

函館の近く、七飯町の大沼のほりに広大な二次林が広がっています。そこはかつてリゾート開発が盛んだった頃にゴルフ場の開発計画があった場所。バブルの崩壊で計画が頓挫し、その跡地でNPO法人大沼・駒ヶ岳ふるさとづくりセンター、株式会社流山、大沼流山森づくりネットワークなどの4団体が進めているのが人が集う森づくりです。

大沼の湖水と駒ヶ岳の裾野という豊かな環境に広がる二次林は、いわば地域の里山。森を活かした自然体験活動は、森づくり体験、森のようちえん、森や地域の産物を利用し

た生活教室などなど。木育をテーマにした木育フェスタも毎年行っていて、主に函館方面の子どもや大人を中心に、様々な人がやってきます。また、東日本大震災で被災した子どもたちに自然体験を提供する「ふくしまキッズ」の受け入れで夏と冬にたくさん子どもたちが交流する北海道の拠点にもなっています。

この森のそんな活動の多くに登場するのが馬をはじめとする動物たち。馬の世話からはじまり、乗馬はもちろん、馬と一緒に仕事をしたり、馬に遊んでもらったり、ヤギの乳を味わったり…。この森ではさまざまな場面で登場します。

そもそも、かつては人の生活に馬をはじめとする家畜たちは必要不可欠な暮らしのパートナーでした。戦後の機械化によって急速にその姿を消してしまいましたが、同時に動物たちとともに過ごすことで得

ていたさまざまな恩恵や学びも失ってしまったのかもしれない。それは森づくりも同じこと。山仕事には馬は欠かせない存在でした。馬と一緒に仕事をしたというお年寄りも、北海道ではまだまだ多くいらっしゃいます。道南地方では特に最近まで林業の現場に馬が使われていたといえます。

この森では、かつてそうだったように馬が人と暮らし、人と遊び、人と働く、そんな場を作り出しています。

森の中に馬がいる風景。それは昔の人の記憶に埋もれ、今では目にすることがなかなかできないものになってしまいました。

しかし、実は馬がいることで森づくりがこんなにもおもしろく、生き生きとしたものになるということを、この森を訪れると感じることができるかもしれません。動物が関わることで森づくりが生き生きとする、それってどういうことなのでしょう。

どろぶつ の いる もりづくり

馬が森と人をつなぎ、人と人をつなぐ… 馬がいる森づくりって、どんなもの？

古くて新しい森づくりについて聞いてきました。



力持ちの馬がいると



みんなで森づくりができる



馬とのコミュニケーションで癒される



加：加藤京子さん（株）流山森づくりを担当。木育の専門家、森林生態学の博士号を持っている。



馬がいると人が集まる



動物がいると生まれる、色んな役割、色んな居場所

馬がいると、なぜ“いい森づくり”ができるの？

●馬でどんな森づくりを？

西：手法としては「林間放牧」と「ホースロギング」ですね。林間放牧は森に馬を放して下草を食べてもらい、森をすっきりさせる、という手法です。人が立ち入れないほどのやぶでも馬がまずはきれいにしてくれるから。

●林間放牧は何となく分かりますが、ホースロギングって？

西：森で伐った木を馬で運び出すことです。日本では「馬搬」と呼ばれます。昔はどこでも行われていましたが、戦後に機械化が進むとともに消えていきました。東北の遠野でわずかにまだやっている人がいます。

●確かに、山仕事をしていたお年寄りは馬の話をよくしてくれますね。そういう技術の伝承という意味合いで取り入れているんですか？

西：この森のある道南地方は、日本でも最後まで馬搬が残ったところで、まだ実際に馬搬をしていた人がその技術を伝えてくれるし、道具も残っています。北海道に昔からある森づくりの技術

を残して伝えていきたいという思いはもちろんあります。

●そのほかに、森づくりにおける馬の魅力ってなんでしょう？

西：森を傷めない、環境にやさしい森づくりができるってことです。化石燃料を使わないし、騒音も出ません。木を伐り出すなら重機を持ってきたり、重機が通る林道を整備しなきゃならないですが、馬なら必要ありませんから、森づくりのコストカットにもなりますね。

●森林の環境をできるだけ保全した施業ができるというわけですか？

西：それだけじゃありません。森づくりという作業を機械ではなくて馬という生き物とやっているって、とても癒されるんです。僕は林業会社で働いていたことがありますけど、一日中重機に乗って作業しているのと馬と作業していると、精神的な疲れは全然違うと感じました。馬との作業はコミュニケーションも必要です。だから、一人で作業しているという感覚もない

ですよ。

●これから馬を使った森づくりにどんな未来を考えていますか？

西：特にホースロギングは、今の北海道の基礎を作ってきた技術でありながら、これからなくなっていってしまう。森と人の関わりの中で今このタイミングだからこそ継承する時期だと思う。これは、北海道の未来への貢献でもあると思います。これから、もっと技術を高めて、いろんなことを学んで、いざ馬を使った森づくりが北海道中に広がってほしいですね。

●他の人もできますか？

西：いきなりは難しいです。だから見に来てほしい。馬を使った森づくりのメリットや楽しさがわかってもらえるんじゃないかと思います。

北海道の森はもっと生活と近くなっていったらいいですね。薪ストーブとかで。馬も実はとっても身近な動物だったんですよ。だから、馬と森と人の三者が近い存在で、ともにある関係になっていったらいいなと思います。

大沼ふるさとの森が目指す“動物のいる森づくり”って？

●大沼の森はどのように利用されているんですか？

加：今では4つの団体が役割分担をしながら森に関わっていて、この場所ですることをやっています。ホーストレッキングなどのアクティビティをはじめとして「ふくしまキッズ」の受け入れや、森での幼児教育、木育イベントなど、色んな環境教育の場として森を活用しています。

●大沼の森づくりの特徴を教えてください。

加：それはもちろん馬を使った森づくりを進めている点です。当初は森が荒れ放題だから、森づくりをしないと人が入ることすらできなかったんです。ですから、効率のいい森づくりを考えていたときに馬による林間放牧という手法に行き着きました。

●林間放牧はどこで知ったのですか？

加：数十年にわたって北海道大学が林間放牧を研究していて、その森を案内してもらいました。そこはすごく居心地のよい森になっていて、大沼でもこん

な森ができるんじゃないかと思って導入したんです。実際に北大の先生に来て頂いて指導も受けました。

●それで、さまざまに利用できる森ができたんですか？

加：まだ森づくり的には、人が入って作業や利用可能な空間を確保できるようになった、という段階です。居心地よい森を作るには、やっぱり長い時間が必要で、それを目指して馬による森づくりを進めているところです。

●具体的には、どんな森を目指していますか？

加：草原から森へのグラデーションを作りたいと思っています。たくさんの人に来てもらうためには森が好きじゃない人が楽しめる場所も必要で、そこから少しずつ深い森に誘っていきけるような森ができればいいなあ。

●馬は大沼の森にとってどんな役割を果たしているのでしょうか。

加：森を拓いたり丸太を出したりという作業は大切です。それだけでなく、馬がいることで老若男女多くの人が

いっしょに森づくりをできることが重要でした。それに、今まで森に来なかったような人も馬がいるからと足を向けてくれるようになりました。馬が人と森をつなげる存在なんだなあ、と思うようになったんです。

●馬が人と森のかけはしに？

加：はい。動物はいるだけでその場をやらなく和ませてくれます。環境教育のプログラムもとてもよいものになる。特に馬は世話や餌やりや乗馬や、いろんな関わりが出てくるのでどんな人でも役割や居場所を与えてくれる、という特性もありますね。

●馬が森にいることで活動の幅がずっと広がるんですか？

加：そうですね。いろんな効果を目指して活動していきたいです。馬を使って里山資源を活かした森づくりをしたり、森づくりの現場に子どもが来ることで森林環境教育も進めていける。馬がいるから広がる、そんな大きな可能性のある森にしていきたいかな、と思っています。✦

昔からの馬との暮らしの技術は北海道の宝物



林間放牧 ビフォー



林間放牧 アフター



西：西埜 将世さん
大沼流山森づくりネットワーク
ホースロギング担当。以前は
林業現場や社会教育施設で活躍。



永く使えるものって、カッコイイじゃないですか。

ククサはしもかぶ工房にとって代表的な商品なんですけど、作るきっかけはこれといったものじゃないんです。町内でカフェを開く知人に食器を頼まれて、その流れでたまたま作ったってうか。ただ、僕は商品を長く使ってほしいという思いがあって作っているんですね。

ククサはフィンランドの先住民、サーミの伝統的なカップですが、シラカバの木のこぶからお父さんが子どもに作ってあげるものですね。小さい頃はミルクを飲んで、大人になったらお酒を飲んで、一生使うもの。日本には子どもから大人までずっと使えるものって少ないと思うんです。思い出の品って感じで子どもの頃のものを持っている人もいますけど、ノスタルジーではなくてカッコイイものとして商品を作っていけたらいいな、と思っています。そういう意味ではククサは思いを込めた商品です。

作る商品はククサを含めて、主に占冠の道の駅で販売できるおみやげサイ

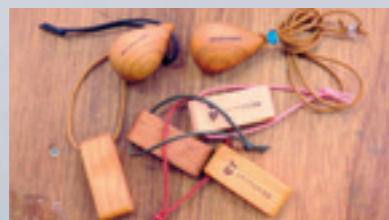
ズのもの。日常の使い勝手にこだわっていて、デザインが作り手のエゴになってはいけないと思っています、やっぱりシンプルなものになっていくんですね。そこに、シンプルだけど本当に必要な機能を追求していくと、デザイン上では見えない部分へのこだわりになったりします。例えばうちで作っている箸置きは見てわからないくらいいわずかに凹んでいます。こうするとテーブルの上で安定が全然ちがうんです。そういうちょっとした使い勝手にも気を使って商品を作りたい。

もうひとつ、「木をいつも持ち歩くのっていいな」という発想から作った「タッチウッド」。無垢の木って身の回りにはあまりないので、普通の人は手触りって意外に知らない。この木片を触ってその心地よさに驚く人も多いですよ。触り心地を楽しめるように入れた凹みも絶妙だって評判なんです。樹種によって手触りが全然ちがうので、自分の好みを探せるのもポイントかな。

もともと岐阜で育って大学時代を北

海道で過ごして、本州の植林ばかりの山と全然違う北海道の森や自然のきれいさが気に入ったんです。卒業後、飛騨高山の家具工房や建築事務所で修行して独立しました。北海道に工房を作りたいと思っていたところ、占冠村で木工の補助金があるという話を聞いてやってきました。当面は観光協会として活動して、合同会社として独立したのが2014年。これからはわざわざ商品を買いに占冠に人が来てくれるようなブランドに育てていきたいのと、都市部に出ていってしまう地元の若者を育てるようなこととして、地域に貢献していけたらいいと思っています。

木がちょっと身近にあると癒されますよね。ことさらにエコを考えるとかじゃなくて、木のものがあって「木っていいよね」って思ってもらおう。そういうちょっとした癒しが出発点になればいいんじゃないかな。都会の人には安らぎを、地元には発展を。そんなふうに考えてやっています。✦



主力商品である「しもかぶククサ」はさまざまな形と表情。同じ木からベアカップを削り出すなど、こだわりが強い(左)。木に触れると災難から守られるというイギリスの風習にヒントを得た「タッチウッド」のシリーズは人気の商品(右上)。木の魅力を引き出すにはシンプルな形がいい、と話す合同会社しもかぶ工房代表の吉田耕一さん(右下)。



大きな木の 小さな物語

④ アカエゾマツ

「北海道の木」ってご存じですか？

1966年9月30日に指定され、「エゾマツ」となっています。ただしアカエゾマツも含むとされているので、ここではアカエゾマツも北海道の木ということにしましょう。

アカエゾマツは道内の樹木の中でも最も寿命が長いグループに属し、平均樹齢は250年を超え、最高樹齢は614年という記録もあります。平均でもトドマツの2倍も長生きします。樹高は最大で30~40mにも達し、太さは1~1.5mになります。樹高は、エゾマツと並び最も高くなる樹種のグループに入ります。落葉広葉樹との混交林でも、頭ひとつ飛び出ている感じがします。このあたりが、その「エゾ」という名とともに「北海道の木」に選ばれた理由なのでしょう。

アカエゾマツはエゾマツに比べると、ずいぶん身近にあります。というのは、エゾマツは発芽して育つときに葉が土に触れると病気にかかりやすく手間がかかるので苗木はあまりつくられていません。つまり植えられたものは少ないのです。これに対してアカエゾマツはその心配がないので苗づくりの技術が確立していて、植林だけではなく公園や緑地などにもたくさん植えられています。

一方アカエゾマツの天然分布を見ると、北海道全てにあるわけではありません。概ね黒松内低地帯を境にして、その南の渡島半島にはありません。誤解をおそれずに書くと「ブナのあるところアカエゾマツなし」といってもよいかもしれません。

最後に、アカエゾマツ・エゾマツ・トドマツの簡単な見分け方を。まずは枝先をぎゅっと握ってみてください。痛くなければ、それはトドマツです。トドマツは葉先が尖っていません。痛し、と思ったら、次に葉を1枚だけ取ってください。親指と人差し指で挟んでコロコロ転がったらアカエゾマツ、扁平で転がらなかつたらエゾマツです。アカエゾマツは断面が六角形なので転がりやすいのです。一度お試しあれ。✦



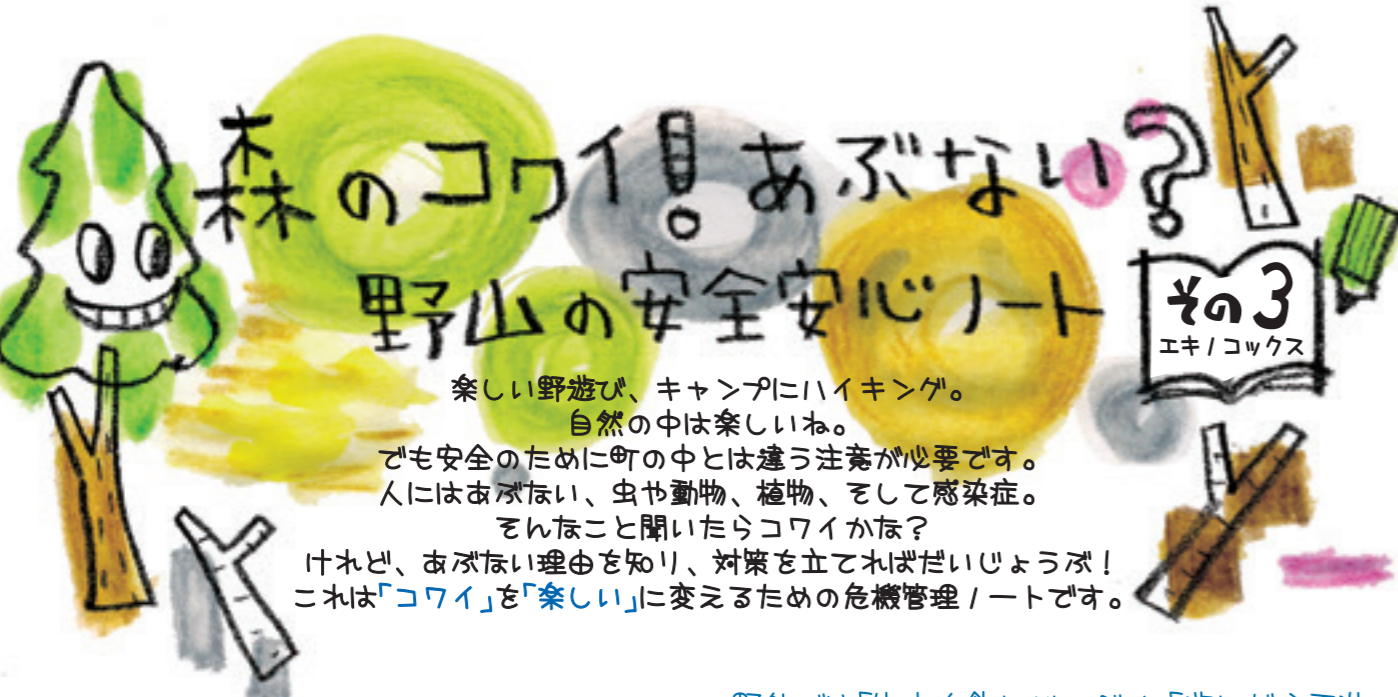
text/images 孫田 敏

‘54年山形県長井市生まれ。’77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。’90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士(建設部門・建設環境)。’00年から北の里山の会代表。著書:アトリウムと植生(積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計:絵内正道編著)、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方(水辺域管理—その理論・技術と実践—:砂防学会編)、森林管理と市民参加(北のランドスケープ 保全と創造:浅川昭一郎編著) WEBサイト「Scan Botanica」<http://scanbotanica00.sblo.jp>



北海道庁ホームページ:北海道の木
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/bns/symbol.htm#ki>
遠達定元,1994,樹木社会学,450pp,東京大学出版会
※画像素材提供:雪印種苗株式会社(稚樹)

hinoma.com
FLORA OF HOKKAIDO Distribution Maps of Vascular Plants in HOKKAIDO, JAPAN
<http://www.hinoma.com/maps/index.shtml>



森のコワイ! あぶない? 野山の安全安心ノート

楽しい野遊び、キャンプにハイキング。
自然の中は楽しいね。
でも安全のために町の中とは違う注意が必要です。
人にはあぶない、虫や動物、植物、そして感染症。
そんなこと聞いたらコワイかな?
けれど、あぶない理由を知り、対策を立てればだいじょうぶ!
これは「コワイ」を「楽しい」に変えるための危機管理ノートです。

野外では「生水を飲んじゃダメ」「遊んだら手洗い」とよく言われるよね。何の病気の予防かな? コワイ相手のことを知ってきちんと備えましょう。

重力物からうつる 病気を正しく知ろう

エキ/コックスと感染症 がんせんしょう



エキ/コックスの生活は?



幼虫に寄生されたネズミを食べたキツネや犬の体で成虫に

寄生されたネズミは動きが二倍速い

キツネや犬たちは腸に寄生されるから、少し栄養を取られるくらいで健康でいられるよ。成虫も卵を産み続けられる。この状態のキツネたちを「終宿主」といいます。

虫の卵はフンと一緒に体の外へ
直径0.03mmの卵がちらばる!
目には見えない大きさ



ネズミは肝臓に寄生されるので体が弱ってしまふ! これを「中間宿主」といいます。なぜかエキ/コックスには人間がネズミと同じ中間宿主に見えるらしく、卵が口に入ることによって発病につながります。

人から人、ネズミから人へは感染しません。

寄生虫って聞くと恐ろしいけれど、これも生き物の一種。生きて子どもを残すために活動しています。

成虫はキツネやタヌキ、犬の腸に棲んで卵を産むよ。卵はフンと一緒に出て野外に散らばり、これを口にした野ネズミが感染。ネズミの体の中で幼虫になつて寄生します。するとネズミは動きが鈍くなり、キツネや犬たちに食べられやすくなる。

こうしてエキ/コックスの寄生サイクルがつながっていきます。

※寄生とは、ある生き物が他の生物(宿主)から栄養を一方的にもらうことです。

ボクのとこにエキ/コックスを連れてくるのはだれ?
～感染源について～

昆虫に寄生されたイヌ科の動物が感染のもと(感染源)になることが多いよ。北海道のキタキツネは60%、タヌキが10%、犬は0.5~1%がエキ/コックスに寄生されているといわれています。ペットの犬でも、散歩中にネズミをくわえたり、なめたりして感染します。
犬の感染率は低いけれど、君たちと触れ合う機会はキツネやタヌキと比べられないほどたくさんあるよね。口やおしりのまわり、なでている毛に虫の卵が着いていることもあるよ。
道路や観光地に現れて人に近づくキツネも感染源になります。かわいいけれどさっちゃんダメ! 野生動物にエサをあげると、人に近づくようになるので絶対にやめましょう。



感染しないために...
～予防法～



エキ/コックスのことを知るとペットの犬もコワイ見えちゃうかな? でもだいじょうぶ! 寄生されているかどうかはフンの検査でわかるし、駆虫薬(寄生虫を体から出す薬)で虫下しできます。野生のキツネでも駆虫薬入りの餌を計画した場所にまいて食べさせる対策があるんだって。

私たちが気をつけたいのは地面や草原に散らばる虫の卵を「口に入れない」こと。そのためには生水(野外の水)に気をつけるだけでなく、手洗いをしっかりし、靴の泥を落とすことが大切! 野遊びして、そのままの手でおにぎりを食べていないかな? 口にするものを手にする前に、手洗いのクセをつけましょう!



もっとくわしく...
エキ/コックスの潜伏期は数年以上と長いので、血液検査による早期発見が大切です。病巣が小さいうちは手術などで完治します。現在は不治の病ではありません。

鳥から人にうつる病気もあるよ

ニュースでたまに聞く、鳥インフルエンザもそのひとつ。海外から飛んでくる渡り鳥を止めることはできないので、感染が広がる環境を作らないようにすることが大切です。まず気をつけたいのが餌付け。エサをあげると人と鳥が近づいてしまふし、たくさんの鳥が集まると一気に病気が広がるキケンがあります。餌付けによって数千羽が集まるハクキョウの名所は大丈夫なのかな? 小さなお子も野鳥のフンや羽毛の中を歩いているかな? もしエサ台や鳥小屋の掃除をしたり、鳥がたくさんいる場所を歩いたら、手や靴をよく洗いましょ。

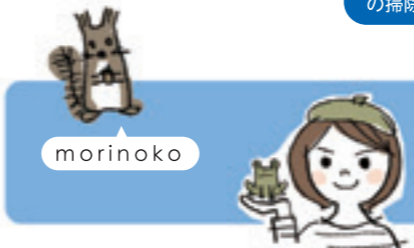


もっとくわしく...
2006年に起きたスズメの大量死も原因は感染症といわれています。冬の餌付けでエサ台に大群が集まり、フンなどを経路してサルモネラ菌などに感染したようです。過剰な餌やりをしない、エサ台の掃除後は手や靴をよく洗う等の対策を。

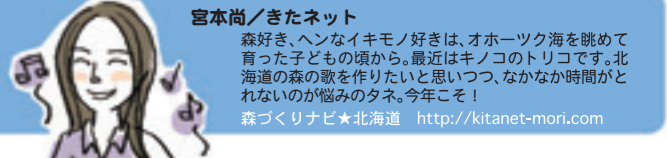
エキ/コックスは用心して予防し、早期発見で治る病気です。キツネだけが危ないとか、生水を飲まなければ大丈夫というものではありません。ニンゲンも生き物の一員。おやみに近づいたり、やたらと追い払ったりしないで、そっと距離をおきましょう。野生動物はペットとは違うのです。



1955年、福井県生まれ。北大ビッグマ研究グループに入り、大学院まで7年間、北海道の森を歩く。北海道新聞記者として道内各地を転勤。2010年、早期退職し、森ガイド兼木こり。NPO法人もりねっと北海道理事。旭川市在住。



新岡薫/エトブン社
北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いているイラストレーター。トカゲと鳥とエソシカが気になる。猫とキツネを見たら追いかけ。クモはちょっとコワイ。好きなことは森と動物園と水族館の散歩。札幌出身。ブログ <http://etobunshaimyezo.blogspot.com/>



森好き、ヘンなイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて育った子どもの頃から。最近キノコトリコです。北海道の森の歌を作りたいと思いつつ、なかなか時間がとれないのが悩みのタネ。今年こそ! 森つくりナビ北海道 <http://kitanet-mori.com>

吹雪の夜の思い出

忘れられない思い出があります。

このコラムには何度か書いていますが、私は子ども時代の数年間、オホーツク海沿岸の小さな小さな村に住んでいました。今は廃線になった鉄道が海岸沿いを走り、夏にはハマナスが咲き乱れる海辺に、小さな無人駅がぼつんと建っていました。そこから2kmほど谷に入ったところにあった小学校の、私が住んでいた教員住宅が今回の舞台です。

真冬のオホーツク、母と幼かった私は、最終列車で家に帰るところでした。駅まで父が車で迎えに来る予定になっていましたが、着いてみたら猛吹雪。国道は至るところに吹きだまりができていて、父の車の姿はありません。村にたったひとつの駅前よろず屋の赤電話から自宅に電話、家の前の道が閉ざされて車が出せる状況ではないということ。隣のタクシー会社に電話しても行けないと言われました。さて、どうしたものか。タクシーもだめだった、と家に再度電話すると、「駅で待っていなさい、迎えを頼んだから」と父。迎え？

その時、遠くに小さな影が見え、あっという間に近づいてきました。鈴の音、鎖のふれあう音、激しい息づかい…あ、馬だ！馬糞だ！「たいへんだったねえ、迎えにきましたよ」、その声は友だちのお父さんでした。馬は、よく遊びにいつて触らせてもらっていた栗毛のどさんこです。

私たちは木でできたソリに乗り込みました。「寒かったでしょう」と膝にかけてくれた毛布は、湯たんぽでポカポカに温まっていた。差し出されたマホウビンには、温かい牛乳。馬は一声鳴いて吹雪の中を走りだします。懐中電灯の灯りが指し示す雪深い道を、ぐいぐいソリを引いて走っていくのです。馬の息が白くなびき、シラカバ林の白い幹が後ろに飛び去っていきます。雪煙と、風の音、馬の息づかい、時折響くかけ声、鎖がふれあう音、ドリフトするソリ。雪に打たれて熱を持った頬がさらに興奮で熱くなり、さっきまで震えていたことを忘れました。このままソリに乗って空にあがっていくかも…という子どもの夢はつかの間、いつのまにか自宅に到着していました。その時の私の目は、おじさんと馬への尊敬でキラキラ輝いていたでしょう。馬糞に乗ったのは初めてではなかったけれど、あのようなドラマチックな経験は、私の人生であの一度だけです。

ここ数年の異常気象、雪に封じ込められてなくなられた方のニュースを耳にする時、今の私たちの暮らしが車社会ではなく馬社会だったら、馬たちは、あの時私を救ってくれたように、遭難した人のために、吹きだまりや風をものともせず命を救うためにがんばってくれるのではないかと思います。

私が育った谷には、いつもたくさんの動物がいました。犬、猫、ニワトリ、ヒツジ、子牛、子馬…。私は一日中動物たちと遊

んでいました。生まれただけの馬の子がやっと自分の足で大地をふみしめた瞬間や、犬の子がはじめて目を開いた瞬間、さっきまで駆け回っていたニワトリが首を切られ羽をむしられ、自分のお皿にのるまでの道のりも見ました。

その頃私は姉妹のように暮らしていた犬を失いました。トウモロコシが苦手な、自分で食べずに犬に食べてもらっていたのです。それが原因で消化不良を起こして、犬は死んでしまいました。一日中どこに行くにも一緒だった彼女を、自分の好き嫌いが原因で失ったのです。つい数年前まで、2匹の猫といっしょに暮らしていた時にも、その犬のことを思い出して、今度こそはちゃんと命を全うさせようと思ったものでした。

動物は人に寄り添い、暮らしを支え、心を癒し、時には人の命を救い、出会いや別れ、命の尊さを教えてくれます。動物と暮らすということは、命と向き合うことです。言葉が通じない、全く違ったイキモノと、時間を分け合い、一緒に何かを達成する、その経験はかけがえのない、バリアフリーの思いを育ててくれる。人は身近な命との交流をいくつも経験して、生の尊さを知り、命を守り育てる大人になっていくのだと思うのです。

動物とともにいる時、人は豊かに神々しく見えます。たぶん、それは人があるべき自然な姿なのでしょう。パートナーを慈しむ大人たちの姿が、子どもたちの心の栄養になってくれるといいですね。



みやもと なお
宮本 尚
認定NPO法人北海道市民環境ネットワーク「きたネット」常務理事
オホーツク出身、東京での生活を経て、札幌市在住。コピーライター、心身障害児(者)の介護・マネージメントなどを経て、現在はきたネット理事のほか、「北海道エネルギーチェンジ100ネットワーク」代表、シンガー・ソング・ライター。

Re Report

第5回 北海道の森づくり交流会

今回のテーマは「誰もが参加したくなる森づくり」
たくさんの人が集まると森づくりはどんな風に発展するだろう？



特別講演

参加したくなる森づくり

たくさんの森に関わる人たちが集まった第5回北海道の森づくり交流会は恒例の特別講演から。今回は「森の健康診断」や「木の駅」で多くの人が関わる森づくりの手法を生み出した丹羽さんが話してくれました。

自分たちが森のことを考える、そのために必要なこと

山主さんが森と向き合わなくなって森は荒れ、大きな災害が起こるようになりました。都会の人は木を伐るのは良くない。植樹がいいと信じているし、森を管理する村の人は金にならない森に向き合わない。そして森が荒れて災害になる。丹羽さんが話してくれたのは、そんな悪循環を断ち切る方法でした。

●森の健康診断

日本の森は荒れている。だけどそんな森がどれだけあるのかは誰も知らない。だから調べようと始まったのが「森の健康診断」なのだそうで

●木の駅

こちらは本気になった山主さん3人とよそ者1人がいればできる「木の駅」。間伐した木を地域通貨に換え、地元で消費するというシステムで、森が元気になり、地域通貨で地元の商売が活性化するという好循環を生み出します。今は多くの山主さんが山仕事の素人。でも素人同士が仲間になって教え合うような関係が育つのも大事なのだとか。こうした動きがもとで地元で木質バイオマスのボイラーが整備されたり、間伐材を地元で消費する仕組みが育った地域も多く、今では全国

にたくさんの「木の駅」と独自の地域通貨が生まれています。

こうした取り組みには子どもの存在も重要です。何も無いと思われていた田舎の集落でも、周りの木々が宝物に見えてくる。子どもたちは「あの山は7割伐らにやいけませんね」とか「あの木はいくらになりますね」とか、身の回りの資源に気づく。すると、都会に行かなくても暮らしていけるかもしれないと思うようになる。

そんなふうな、森が起点になって村中がお互いのことを考えるようになる。そうして自治的な森づくりの場を作り出していくことが、これからの日本の森づくりには大切なのだと考えさせられる講演でした。



丹羽 健司氏
NPO法人地域再生機構木の駅アドバイザー、総務省地域再生マネージャー。市民参加型の森林調査「森の健康診断」や「山里聞き書き塾」、「木の駅プロジェクト」などを手がける現在注目される地域再生人。著書に「素人の山仕事入門」「森の健康診断」(築地書館)、「木の駅」(全林協)など。

鼎談 みんな、森づくりに行こう！

丹羽さんの講演を受けて、北海道の森づくりには今、何が 필요한のか、各地の取り組みを交えて3人が語りました。

あすもりは2008年から森づくりを続け、同時に森づくりへの理解を広げる活動もしてきました。釧路地区委員会は森の魅力や資源、問題など幅広く学び、Fの森では森づくりのデザインを市民が行い、木育の活動も活発です。それをどう思うか、また、これからの北海道の森づくりに何が必要かを聞かせてください。



浜館三裕姫 (あすもり基金運営委員)

Fの森では、みんなでこの土地が何を求めているのかを丁寧に調べていて単純にすごい！
釧路の組合員のみなさんの取り組みも、企業などを巻き込みながら森づくりに関わることを試行錯誤していると思う。それをどう楽しんでいくかがポイントかな。木育グッズなんかは、買ったお金の一部が森づくりに使われる、そういうストーリーが見えると、自分と森のつながりができる。その先に山主さんとのつながりをつくると面白くなると思います。



丹羽健司 (特別講演講師)

丹羽さんのお話から、山主さんを放っておかない、自分のものをどうするかという発想を持たせるのが重要なんだと感じました。森づくりの現場には若い人も大切に、私は学生に現場を見せて、体験して学んでもらうということを大事にしています。北海道の森づくりに、人の輪を広げて森づくりをして、その人たちが森を、地域を自治にどうつなげていくかが大事。色んな団体が助け合って、よい森づくり、地域作りが育っていけばよいですね。



柿澤宏昭 (あすもり基金運営委員)

event

2014年度の森づくりワークショップ 3年目のFの森 ワークショップ

写真提供 川口弘高(きたネット)

子どもや孫がこの森にいる姿が、
少しずつ見えてきました。



Fの森全図

2012年度から始まった市民による森づくりプロジェクトも3年目。はじめは地図や植生の見方も手探りで進んでいたメンバーも、Fの森にだんだんと理解を深めてきました。

Fの森の地形だけでなく、植えた木々がどうなったのか、どれくらい育ったのか、どれくらい枯れてしまったのか、そしてその原因は何なのか。

今回はそういった、自分たちがこれから立ち向かうであろう森づくりの問題点についてしっかり向き合ったシリーズだったのではないのでしょうか。

Fの森の調査を丹念に行い、雪や動物によって被害を受けた苗木に添え木を当て、植樹エリアの残りの面積も考えながら、じゃあ来年の植樹はどうしていくか。その次の森づくりはどんな形がよいのか。メンバーが深く森づくりに関わる中で、木とそ

れを取り巻く生態系、そして100年かけて森を育てていく私たち自身がどんな視点を持つべきなのか、重要な気づきがたくさん得られた今回のシリーズです。

ワークショップシリーズ後半には次のシーズンの植樹をどうするか、それにともなってトレイルや新しいテラスも具体的に考えました。植樹地が遠くなったら、集合場所から子どもたちが移動するのも大変になってしまう。そんな風に、植樹祭の運営側の視点をもって設計図を考えるようになってきました。

その結果、2015年の植樹地は、花や実を楽しめる低木、花を楽しめる高い木、それから天ぷらの木のゾーンなど、テーマに合わせて選定した樹種を6つのゾーンに分けて植樹することになりました。

植樹祭で初めて登場する樹種もたのしみな2015年度の植樹祭、ぜひみなさんもお越しください。



2014年度 森づくり ワークショップ報告

5/24 育樹&Fの森の育成調査

あすもりサポーターの育樹と同時に開催。植えた樹の育樹作業やFの森の植栽木の調査を行い、札幌に帰った後は植樹祭の打ち合わせを行いました。



7/26 植栽木と植樹地の調査

植栽木の様子をじっくり観察。植えばなしではいけないこと、森づくりへの関わり方もじっくり考えた1日でした。



10/4 育樹&Fの森植樹地調査

植栽木の剪定やのびた草の除去などの管理とFの森の調査を行い、今後の森づくりについて話し合い、2015年度の植樹地も決定しました。



11/25 2015年度植樹計画の立案

これまで見てきたFの森を思い浮かべて次年度の植樹を計画しました。WSメンバーのこれからの活動や森づくりについて話し合いました。



Sponsors

2014年度 コープ未来の森づくり基金 ご協賛を頂いた企業・団体様

コープ未来の森づくり基金は、下記の企業・団体の皆様をはじめとする多くの方々から支えられて運営しています。

(株)青い海 赤城乳業(株) 赤穂化成(株) アサヒ飲料(株) 味の素ゼネラルフーズ(株) 味の素冷凍食品(株) イチビキ(株) 一正蒲鉾(株) イトアンド(株) イトウ製菓(株) (株)入福 福田商店 井村屋(株) 岩下食品(株) 岩田醸造(株) 岩塚製菓(株) UHA味覚糖(株) (株)宇治園 内堀醸造(株) 江崎グリコ(株) エースコック(株) エスピー食品(株) 越後製菓(株) (株)江戸屋 エバラ食品工業(株) 江別製粉(株) (株)大井川茶園 大塚製菓(株) 大塚製菓(株) (株)小倉屋柳本 オシキリ食品(株) オタフクソース(株) オハヨー乳業(株) (株)小原 花王カスタマーマーケティング(株) カゴメ(株) 片岡物産(株) 加藤産業(株) (株)加藤美峰園本舗 かどや製油(株) (株)カネカシーフーズ カネリョウ海産(株) カバヤ食品(株) カンロ(株) (株)菊水 (株)菊田食品 北日本フード(株) キッコーマン食品(株)	(株)紀文食品 キュービー(株) (株)キョウショク キング醸造(株) クラシエフーズ販売(株) (株)グリーンズ北見 国分(株) こはぎや本舗茶茶 コンフェックス(株) (株)サクラバ (株)札幌パティ 三栄食品(株) 三幸製菓(株) サントリーフーズ(株) サンヨー食品(株) (株)シーファーム ジェイティ飲料(株) ジャパンフリトリー(株) (株)白子 シロクマ北海食品(株) (株)新進 新得物産(株) (株)ビックスコーポレーション 笛木醤油(株) 福山醸造(株) (株)藤沢商事 富士食品工業(株) フジッコ(株) 伏見蒲鉾(株) (株)不二家 フタバ食品(株) ブルドックソース(株) (株)ブルボン (株)べつかい乳業興社 ベル食品(株) ホクテ小牧きこの販売課 ホクレン農業協同組合連合会 北海道味の素(株) 北海道漁業協同組合連合会 (株)北海道日水 北海道森永乳業販売(株) ポッカサッポロ フード&ビバレッジ(株) (株)堀川 マルカワ食品(株) マルコメ(株)	日清フーズ(株) 日本オリゴ(株) 日本食研(株) 日本生活協同組合連合会 日本製粉(株) 日本ハム北海道販売(株) 日本ルナ(株) ネスレ日本(株) ノーベル製菓(株) (株)ノースカラース ハインツ日本(株) ハウスウェルネスフーズ(株) ハウス食品(株) (株)はくばく ハーゲンダッツジャパン(株) (株)シーファーム (有)八戸屋 ハッピーフーズ(株) ハナマルキ(株) ハラダ製茶(株) (株)パールエース (株)ピエトロ (株)ビックスコーポレーション 笛木醤油(株) 福山醸造(株) (株)藤沢商事 富士食品工業(株) フジッコ(株) 伏見蒲鉾(株) (株)不二家 フタバ食品(株) ブルドックソース(株) (株)ブルボン (株)べつかい乳業興社 ベル食品(株) ホクテ小牧きこの販売課 ホクレン農業協同組合連合会 北海道味の素(株) 北海道漁業協同組合連合会 (株)北海道日水 北海道森永乳業販売(株) ポッカサッポロ フード&ビバレッジ(株) (株)堀川 マルカワ食品(株) マルコメ(株)	(株)丸三 北栄商会 マルトモ(株) (株)マルナカ 丸永製菓(株) マルハニチロ(株) (株)マルハニチロ北日本 丸美食品工業(株) (株)みずすコーポレーション (株)ミツカン 三菱食品(株) 三桃食品(株) 南日本酪農協同(株) 明星食品(株) (株)明治 (株)桃屋 盛田(株) 森永製菓(株) 森永乳業(株) (株)ヤクルト本社 やまう(株) ヤマキ(株) ヤマサ醤油(株) 山下食品(株) (株)ヤマダイフーズプロセシング ヤマモト水産食品(株) ヤマナカフーズ(株) ヤヨイサンフーズ(株) ユウキ食品(株) UCC上島珈琲(株) 雪印メグミルク(株) 楽陽食品(株) 理研ビタミン(株) (株)ロッテアイス ロッテ商事(株) (株)わかさや本舗 (株)紀文食品 (株)北海道サンジェルマン ANAフーズ(株) サントリービバレッジサービス(株) シーズイシハラ(株) サッポロビール(株) (株)エフ・エム通商 サントリーピア&スリッツ(株)
---	---	--	---

(順不同)

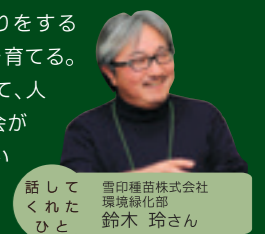
協賛企業に聞いてみた。 応援しています コープの森づくり

雪印種苗株式会社

雪印種苗株式会社は、家畜が食べる配合飼料や牧草の種子の開発や販売を通じて家畜の健康を守っている会社ですが、公園や緑地の造成・管理なども行っています。これも、家畜を育てる環境、つまり、牧場がある山と町の間の農地の環境を良くするために自然を還元する、という考え方から生まれた仕事です。森づくりを仕事として行っているのもそのためです。

コープの森づくりには、講師として関わったのがはじまりで参画しました。私たちに与っては「良い酪農の環境づくりとしての森づくり」という意味合いがありますが、それとともに社会貢献にもなるのではないかと考えて、協力するようになりました。サポーターのみなさんと、植樹だけではなくてどんな森にするのかを考え、木を育てることを考え、生き物との関わりを考えて森をデザインする。それでも考えた通りにいかないのが自然だけれど、それも含めてどんな森になっていくのか実験的なわくわく感もありますね。

こうして森づくりをすることが「いい森」を育てる。「いい森」ができて、人が森に関わる機会が増えていけばいいと思います。



話してくれたひと
雪印種苗株式会社 環境緑化部 鈴木 玲さん

雪印種苗(株) <http://www.snowseed.co.jp>

Present

アンケート&プレゼント

「モリイクvol.9」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

- Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
- Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか？ 右から3つお選び下さい。
- Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか？(はい/いいえ)
- Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
- Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

巻頭コラム(P2,3)
どうぶつのあるもりづくり(P4~7)
木づかい(P8)
大きな木の小さな物語(P9)
森のコワイ!あぶない?(P10,11)
森林再生コラム(P12)



PRESENT!

アンケートに回答いただいた方から抽選で3名様に、しかも工房の人気商品「タッチウッド」をプレゼント。ストラップつきなのでいつも持ち歩いて魔よけ&癒しに。

応募方法

アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。プレゼントの当選は発送をもって替えさせていただきます。

応募締切 5/31(日) 当日消印有効

コープさっぽろ基金事務局

〒063-8501 札幌市西区発寒1条5丁目10番1号
FAX: 011-671-5743
メール: csap.k.asumori@todock.jp



携帯メールは
こちらからどうぞ